

大学『語学教育』の反省と展望

中教審と教養英語の解体を中心に

宮崎 郁司

(一) 答申の趣旨

はしがき 昨年、大学改革に関する中教審答申が公表され、世間一般も新聞その他でその詳細を知ったのであるが、それから一年あまり経ったこんにち、ようやく大学英語教育界はそれへの反応を示しはじめた。「大学改革、第二弾は教養課程『語学』『体育』を選択に―文部省再検討に着手―」という見出しを付けた五月八日の読売新聞朝刊が誘発したのである。第二弾などというバカバカしい見出しには陸戦隊の敵前上陸を想わせる不穏当な響きがあっても、こんな見出しをくふうするジャーナリズムに世間は慣れているのか大した反響も見せなかったが、さすがに英語教師は事の重大さに気がついたのである。問題は、教養英語は会話能力の育成に重点をおけ、という中教審答申の論理とその思想の背景である。

中教審答申 いま論点に直接つながる改革案を引用してみよう。

(一) これまでの一般教育科目の教育がねらいとした語学の総合理解、学問的方法の自覚、文化史的な人間観・価値観のはあくなどの目標については、それぞれ教育課程の中に含めて総合的にその実現をはかる。

(二) 専門のための基礎教育として必要なものは、それぞれの専門教育の中に統合する。

(三) 外国語教育は、とくに国際交流の場での活用能力の育成に努めることとし、必要に応じて学内に設けた語学研修施設によって実施し、その結果については能力検定を行なう。(外国語・外国文学を専攻する者については別途考慮する。)

(四) 保健体育については、課外の体育活動に対する指導と全学生に対する保健管理の徹底によってその充実をはかる。
さて、(四)は直接、語学と関係をもたないが補足説明文が示すよ

うに、体育の単位を弾力的に取り扱えるように改めるべきだという主意において、(三)と共通の要因を持つものである。しかし保健体育については私には触れる資格がないのでその分野の専門家に任せることとして、教養英語担当者がその他の外国語担当者といっしょになって検討しなければならぬのは(三)と(一)と(二)である。なぜなら(三)は(一)と(二)との仮設に立った終結だからである。外国語教育は外国文化の摂取、自国文化への寄与など多方面にわたって人間形成に大切な役割を演じてき、ときには国語の代役まで仰せつかってきた。そのようにして一般教育の他の諸科目と手を取りあつて歩いてきたのである。ところがこの改革案では一般教育科目もこれまでの人文、自然、社会の三系列の原理は否定され、公務に従事しようとする学生のためのコース、企業の経営、管理をめざす学生のためのコースというふうにコース別の教育課程の中にくみ入れられ、その実学的な目的に奉仕するように求められているのである。さらに補足説明文で明らかかなように、そうするために、①一般教育・専門教育という区分を廃し、②既成の学部・学科にとらわれずに、③総合的な教育課程を考えなければならぬのであるから、このことからこの改革案は現行の学部・学科別の専門教育課程(学部別カリキュラム)をも体系的に改めようとするものであることがわかる。右の次第であるから本論では考察の対象を(三)に限定するといへ、論議を展開していく過程で一般教育科目、専門教育課程にかかわらなければならぬのである。またそうすることによって新しい何らかの総合教育課程をくふうするさいの一助ともなるならばさいわいである。

語学研修施設答申の要旨は「外国語教育は教養の目的をあわせ持つものであるが、これまでは活用能力の育成に欠ける点があったから、今後は重点をそこにおく」に示される。さらに大切なことは語学センター(機械設備)でおさめた能力を検定で認めるという点である。検定制は単位制とは異なる概念であるから、検定の結果を単位に換算することは矛盾である。したがって「単位の画一的な義務づけを廃し」、「必要に応じて機械設備で活用能力を育成」という場合、④たんに機械設備の授業のみでよいのか、⑤履修単位数は大学の事情によって現行のまゝでもよいのか、⑥現行の単位数を減らすのがねらいであるのか、それとも⑦と⑧とにそれぞれ④を併用すべきなのか。もしそのいずれかを選べばよいのだとすれば語学担当者としてはその大学の事情と自己の教育上の信条とに従うほかはないであろうと思われる。しかも語学研修施設案には国立大学協会も基本的に賛成であり、文部省もこの改革の実施に着手する意向であることが報せられるにように、いよいよ緊迫感が強まってくるのである。

(二) 問題点

英語教育界の反響 日本時事英語学会関西支部では、この問題についてシンポジウムをもち、大学英语教育学会の機関誌がこのために誌上討論会を企画したり、等によって語学教育界の関心の高まりがしめされるにいたった。私は前者の提題者を引きうけたために、いくつかの資料を用意しなければならなかったのであるが、その中で、大学英语語担当者の意見を集約する必要があるから次の

ものを活用した。それは、「大学英語教育学会通信八月号」、「英語青年十月号」、「英語英文学世界七月号、八月号」、「ザ・ニュー・カレント・リポート九月号」などである。なお資料については助言をいただいた友人に、この機会に感謝の意を表したいと思う。⁽¹⁾これらは誌上討論会、座談会、アンケートなどの形式をとるものであるが、本論では、調査の対象として四十五名の教養英語担当者を選び他の分野の人のものは割愛した。⁽²⁾

概括的に言えば、これらのかたがたは答申に対して、その固有の観点、教育的信条、大学の理念などから各種各様の見解を述べられるのであるが、手はじめに答申に強く反対するタイプとして次の発言をみてみよう。

「外国語はむしろゆっくり深く正確に教え、それによって、軽々しく外国語を口にするようなことは避けるような人物を育てあげていくことが望ましい。こういうことは元来、国語教育が行なうべきことであるが、日本の国語教育はどうやらそういうことはやっていないようである。今まで、その役を曲がりなりにも果たしてきたのが、外国語教育であるが、その外国語教育も最近では機械にまかせておけば外国語は教えられるというような考えが入ってきて、とかく本来の目的が忘れられがちになってきた。大学の「語学」を検討しようなどという考えも、この考え方の延長線上にあるもので、言語に対する感覚を鈍くするということがあらゆる学問の大前提になるという事実を忘れたものである。」⁽³⁾

次に活用能力に重点を置くことには強く反対するが、語学を

選択にする案に賛成、というタイプを代表するものを引用する。

「まして、英語の背景になっている物の考え方、外国語にひそむ文化的な意味、更に基本的には、英語という外国語を読解することに要する知的訓練や、それに伴う母国語や日本文化の反省などには、長期間の学習が望まれる。そういう手続きを全部省略して、ただ上っすべりの英語をしゃべっても、決して教養ある国際人としての日本人のイメージを与えず、むしろ *Anglophone* な経済的、文化的アニマルの威名を高めるにすぎない。言い忘れたが、「教養ある国際人」にならなくてもいい人は、学校で英語を選択しなくてもいいことは自明である。」⁽⁴⁾

右は一つの折衷策であるとすれば、次の三番目に掲げるものも異なるタイプのそれであるといえよう。

「一般学生にも今まで通り、八単位の外国語を義務づけたい。『外国文化に接し、理解を深める』という教養面はいくら重視しても重視しすぎるとはいえない。特にこれを外国語の訳読を通じておこなうのがよい。この上に立てこそ選択科目としての『国際交流に役立つ語学能力の育成』を語学研修施設において行なうのが効果的になろう。ただしこれは集中的に行なうのが効果の点で大切なので、特別の希望者に特定の期間行なえるよう留意するのがよろしい。」⁽⁵⁾

この意見の特長は教養英語の単位は従来通りの八単位を主張しておられ、その上に機械化された施設を特別の希望者に利用させるといのであるから、これを選択科目にするというのは誤りで、むしろそれは随意科目、あるいは課外講座として認めるとい

うふうに理解するのが正しいと考えられる。最後に答申に一番近い改革案を主張される声を聞いてみよう。

「教養を主とするような語学と、実際の運用能力を重視する語学とを二つ認めて、少なくとも多様化の第一歩として、その間を選択したらいいと思うのです。語学センターみたいなものを作って、そこでやるかやらないかを選ばせるといって、いわば all or nothing のような選択制ではなしにですね。」

なお、賛成論の最右翼というものが考えられるとすれば、それは「外国語授業は全部語学センターに移して活用能力に重点を置いてその育成に励め」ということになるかと思われるが、語学担当者の中からはそういう声は聞かれなかった。ただし、当然のことであろう。

反響の種類 調査の対象として描出した四十五氏の意見は右の四つのタイプのいずれかに属することになるのでいまその集計を試みようと思うのである。しかしながら「英語英文学世界」に寄せられたアンケートには提題の二本の柱である「語学の選択制」と「語学研修施設による育成とその検定制」のうち、どちらか一方にしか意見が述べられていないケースが可成りあったため、右のタイプを次のようにイーホに分解して、そこに該当する意見の数を示してみた。

- イ、教養英語は従来通りの必修がよい
 - ロ、教養英語を選択にする
 - ハ、語学研修施設を何らかの方法で活用する
 - ニ、語学研修施設による活用能力育成には反対する
- 18 8 21 21

ホ、ハのために現行の教養英語を全廃してもよい
この数字に現われた結果はわれわれの判断を具体的に導く一つの役割を果たすであろう。

われわれはいま、十人中八人までが高校に進学し、百人の若者のうち二十六人が大学生であり、その大学生の数は全国で百六十万、という状況下におかれている。「英検」「観光ガイド試験」「商英検」にどうしたら合格できるかをたずねにくる学生がふえてきた。私はそういう学生にはできるだけいいに教えてやることにしている。その分野の消息に詳しい英語教育雑誌をすすめたり、オーディオ・ルームの課外放送の利用を思いおこさせたりするのであるが、単位さえとれたらいい、あと何回休んだら受験資格がなくなるかなどと人にきく学生にはうんざりすることがある。まじめなそして探究心を胸に秘めている学生はいったどこへ行ったのだろうかと疑うことさえしばしばである。精神を培おうとする意欲のある学生と本を読んでそれについて考えたり、書いたりするためにはもう選択制、それもある規程をもうけてその規程以上の語学力を身につけた学生だけを集めるために選択制を採用しなければ、これ以上、教養英語は重圧に耐えられずに死滅してしまうかも知れないと思うことさえあるのである。

問題の焦点 前項で得ることができたデータを次の二点で考察することはかならずしも無意ではない。すなわち第一の点はイーホの中でどのようなみ合せが一番多いかであって、この答はローハが最も多く、ついで、イーニであった。二番目の点は答申の語学センターの設置に賛成する理由は何かということである。む

しろこのほうが問題の焦点であるとも思われる。駄足になるかも知れないが、ローハのくみ合せの意見では、ロの主張が主であつてハは従なのであるか、それともその反対であるのか、ということになる。いま、アンケートの中からハの意見を述べられたかたがたの言葉の一部分を引用してみよう。そこに表わされた微妙なニュアンスを読みとるときにこの解答が得られるかも知れない。

賛成論の較差

- 1、「実用面を取り入れようとする趣旨には賛成だが……要は角を矯めて牛を殺さないように願いたい。」⁽⁶⁾
- 2、「話す能力の育成は学問としての体系を持ち難いものでありますから、教育課程の外に置いて、選択した学生のみについて特別の施設で集中的に修練させるといふ構想は結構であると存じます。」⁽⁸⁾

3、「語学研修施設」をつくって集中的に語学教育を行なうというの考え方としては結構だが、現在の大学教師にそれを担当するだけの用意があるだろうか。主として訳読授業だけをやってきた私などはとても引き受ける自信がない。」⁽⁹⁾

4、もし語学研修所を設けるならば研究所の付設とし、主として会話・作文の教育を担当する。」⁽¹⁰⁾

語学研修施設についてその検定に四単位を与えるという意見は前章ですでに紹介をすませたが、いまアンケートに寄せられた意見を集約すればロが主であつてハが従であるとみなすことができるといふ解答が得られた。この判断は決定的ではないが、それがさう勢であるとしてさしつかえないものである。「会話能力の育

成は学問ではない」「課外にせよ」「特設の研究所内の事業にせよ」「私にはひき受ける自信がない」こうした意見の幅の中に、なお検討を要する重大な問題がひそんでいたのである。

それでは語学研修施設による能力の育成は、教養英語を發展させるものであるのか、それとも教養英語を解体、消滅させるものであるのか、という疑念が生じてくる。またそのような問題意識なしにこの改革案を論ずることはできないようである。ここに二つの姿勢が見られる。いま「英語青年」の座談会をみると、外山滋比古氏が教養英語の發展または延命を仮定して語学研修所案に賛成され、佐伯彰一氏は賛成説を主張する中で英語だけでなくその他の外国語をも含めた一般教養科目は消滅するという諦観を懐いておられる。佐伯氏は古典と人間形成にかかわりをもたない英語はもはや正規の科目ではないと主張する。

(三) 環境

三類型の大学 答申は大学を(A)総合領域型、(B)専門体系型、(C)目的専修型に区分したことは周知のとおりである。(A)は公務、企業の経営と管理、文化に従事しようとする学生のための大学、(B)は基礎的な専門技術を身につけさせようとする大学、(C)は教員、海技職員など資格を取得しようとするものための大学というふう

に理解される。これは技術革新によってますます複雑多様化した社会構造に対応するものである。さらに現行の四年の修業年限を三年に短縮し得ることをうたっている点でこの改革答申に深刻な杞憂をいだくものは私ひとりではないであらう。過去において修

業年限を短縮したときは社会を滅亡に導いた危険な時代ではなかったか。英語の授業時間を減らしたり選択にしたり、外国文学の研究を圧迫したりしたときは一億玉碎などという国民の集団自殺の結果を産んだ愚民政策の時代ではなかったか。

技術革新が進み、経済開発は高度に推進される中で、人生の目的と意義までそれに応じて変化していくとは考えられない。個人がその環境に順応して変えていかなければならないのは生活技術のほうである。人間性は条件に適應するものではなく、かえってその逆である。人間性が変わるということは人間性の喪失にはかならない。その喪失が人間疎外という形象をとって現実化されるのである。三類型の大学の概念はこの問題の超克をめざすものではなく、それを推進しようとするところにあるものごとくに理解される。この改革は創造ではなく、破壊である。

生活と生存 ケンブリッジのセント・ジョンズカレッジに滞在中、私はチェコスロバキヤから留学にきている一教授と知己になった。ある日、食事をしながら Ecology を撃攻する彼は彼の Wood Conservation の研究について話してくれた。Conservation は生存のもっとも基本的要因であり、衝動のおもむくままに自然の改造をやることは生命の滅亡を意味する。Conservation の領域と Creation の領域との調和を破った社会的、文化的活動は自然をも人間をも亡ぼしてしまうという法則があるのだと、彼は主張した。かねがね生活は人類が文化的に築きあげたもので、生存は自然界に属するものと割り切って考えがちであっただけに、この価値の倒錯におどろいた私はしばらくはひと言も言えなかったぐらい

大きなショックを受けたのである。真理はつねに美である。彼の言葉はいつまでも、最高に美しいものの一つとして私の脳裏から消えることはないであろう。汚染された空気、破壊された山野、PCBの充満、総水銀のたれ流し、水俣病や四日市喘息、そんな日本を彼は知っていたのかも知れないのだ。

人間性の恒存 チェコの教授の英語はいっぶう変っていた。White Birchを「ワایت・ビルチ」という風に発音した。しかし私にはケンブリッジのイースト・アングリア地方の訛りよりもはるかによく分かったし、彼の仕事の話しを聞いていると、自然科学にまるで無知な私までが魅惑の虜になってしまうのであった。人類への愛情と Wood Conservation の研究の結びつきが私をそうさせたのである。私が 'Human Conservation' について考えてみたいと思ったのはその時からである。これは私が作った術語である。ガルブレイスが苦心して Countervailing Power という術語を創りだして労働者側と雇用者側との均衡、購買と分配との力関係を説明しようとしたように。いまの生活構造で失われている人間性を回復することは至難の業であるが、この貴い仕事に従事しながら人間性を破壊しないでこれをいつまでも維持しようとする仕事もまた崇高な仕事である。

答申の大学の類型化は産業技術に奉仕する実学の役割を定着させようとする意図をのぞかせている。そこには歴史も人間も不在であるから、そのように類型が実現されると予期されるならば、これからの大学は、産業が支配する社会を作り上げる過程で、その産物であるところの人間疎外をますます拡大していくことになる

であろう。世界中のどこにそんな大学があるというのか。中教審はもうすこし、スエーデン、ノールウェー等の福祉国家の制度や、フランス、イギリスの大学制度について勉強すべきである。

(四) 現代外国語

TRIPOS 私が学んだケンブリッジ大学の講義は(1)公開講座、(2)履修認定講座、(3)一般教養講座、(4)基礎講座、(5)優等卒業生科目講座に分けられ、各系列もしくは専攻科目の講義は全て(1)から(5)の中に設置される。(1)は学生と教職員に開放されて行なわれ、講師は学の内外を問わず世界的な権威者が推挙されてこれに当たる。(3)は大学内の専攻別の系列から、その学問分野で業績の高い、そしてこれもまた世界的に認められた教授や博士がこれを担当する。(5)はこの訳語は必ずしもその意味と機能を伝えているとは思われないが、トライポスといわれるケンブリッジ独特の教育史上の産物で、オックスフォード大学の Honours Examinations がこれに対応する。またケンブリッジには「現代・中世語学部」といわれる学部がある。この大学の学部は日本の学部とちがって学生が所属しない学部であることはいうまでもない。外国語はすべてこの学部で編成された教科課程の中で、トライポスとして設けられており、カレッジに在籍する学生がこれを自己の希望によって選択履修するしくみになっている。歴史の中で、外国語としてのドイツ語を例にとると、それは長い間、(2)の認定講座中の一科目として位置づけられたのち、ようやく十九世紀になって(4)の基礎科目に昇格するのであり、やがてコルリッジ、カーライル、M・アーノル

下の活躍に刺戟されてドイツ語・ドイツ文学への関心は異常なばかりの高まりをみせた。たまたま優秀なドイツ語の先生がいたことと学内の強い要請とが力になって、一八八四年にトライポスすなわち優等卒業生教育課程の体系にドイツ語が参加することになったのである。オックスフォード大学では、ギリシャ・ラテンの古典専攻者がドイツ語が右の教育課程に参加して古典と肩をならべることとなる。しかしケンブリッジでもこの新しいトライポスはその後苦杯をなめさせられた。古典専攻のスタッフから Courlet 「Tripos」(この場合は「古典の従者」の意味) 呼ばわりされて、まだ当分は迫害が続いたということである。

(五) 結語

現代人文科学 エディンバラの近郊にいまはささやかな庵を結んで静かに夫人とともに余生を楽んでおられるブルューフォード教授がおいでになる。彼はイギリスでは数少ない外国語(ドイツ語)の教授で、『チェホフと彼のロシア』の名著で知られた現代ドイツ文学の研究者で、ロシア文学にも造詣が深い。教授にお会いする目的で私はスコットランドの旅に出た。十月のそぼ降る雨の日であった。北海の風は肌にしみた。車が門前に着くと、すでに教授は門の脇に傘をさして佇んでおられた。教授は私の挨拶よりも先に声をかけられた。それは私の耳に「おお、よう来た」と響いた。その時の表現は二人の国語のちがいを超越したもので、言葉というよりは心そのものであった。

私の語学教授としての用件は予め通じてあった。応接間に通されると、そのテーブルの上に教授の論文が六点、すでに重ねておいてあった。「あとでこれを読め」と言われ、その日は四方山話しにうちくつろいだ半日をすごした。勧められたクッキーがおいしかった。「君が来るというので昨日一日かかって僕が得意の腕をふるって作ったのだ。よかったら持って帰らんか。」といわれるのである。幼い頃父の実家を訪れたとき、祖父が同じことを言ったような気が、ふと、その時にしたのである。異なった歴史のなかの存在が、たがいにみずからの国語と民族のちがいを忘れた瞬間であった。はるばるスコットランドの片田舎にやっできて、日本にはもうないと思つて諦めていたあるものを探しあてたような気がした。その時の感動は永遠に忘れることはできないであろう。

その時いただいた論文の中に、外国語の教師は「現代語の研究」に従事し、その成果を「現代人文科学」の中に蓄積せよと、教授が提案しておられる論文がある。それは国語とその文化と社会とを総合的に、構造的に探究する学問分野をさすものである。また教授は、そこで次に述べるような授業に関する配慮をもしておられる。学生と文学作品を読むとき、美学的鑑賞を求めてはならない。それは多くの場合、文学専攻の学生を除く多くの学生の勉強意欲をスポイルするうれいがあり、創作上の技法や文学概論を講義すると、それら多くの学生はまだそれほど感情が成熟しておらず、またそれほど豊かな経験を持っていないから、興味を失うばかりか、そのような講義を軽蔑するようになるかも知れない

のだと。

外国語と新教育課程 東京大学の二教授が一部少数の学生に作品を読ませて密度の高い英語教育をしたい、と述べたとき、その場合の少数の希望者の数(選択科目としての語学を選択する学生の数)を大多数の学生の二十パーセントぐらいだと推定されている。昨年十二月に教務部一般教育係が一年生を対象にして、英作、文法、オーディオ、会話、訳読について希望登録を学生にさせたところ、会話・オーディオが全体の六十三パーセント、訳読二十一パーセント、文法・英作十六パーセントという結果を得た。これはさきの東京大学の場合の推定と一致する。このことは英語以外の外国語についてもほぼあてはまるであろう。

答申が実施されると外国語教育は解体するという事態を目前にひかえて、語学教育の本質を軽視することのない新教育課程を、ひとり語学担当者のみならず全学が英知を傾けてくふうする時機がきているのである。そして、以上の分析的観察と、語学教育の理念とに基づく時、現在のオーディオ施設と機能を二・三倍に拡充しながら、「現代人文科学」を科目として設置することを展望の中で見落してはならないのである。最後にこの報告を発表する機会を私に与えられた『同志社時報』の編集委員の好意に謝意を表す。
(大学経済学部教授・英語)

注

- (1) 大学英語教育学会は機関紙のほかに「通信」(月刊)を発行する

- 「英語青年」は英語・英文学の学術月刊雑誌
「英語英文学世界」は教育を主とする月刊紙
「ザ・ニュー・カレント・リポート」は英教師間のコミュニケ
ーションを主とし、年間二回発行
- (2) アンケートは作家、文化人、なども参加しているがこれらは対象から除いた
- (3) 静岡大学教授、以下00までは氏名をあげずに、所属大学だけにとどめた
- (4) 東京教育大学
(5) 奈良女子大学
(6) お茶の水女子大学
(7) 元早稲田大学
(8) 東京学芸大学
(9) 東京大学
(10) 大阪大学
(11) お茶の水女子大学教授
(12) 東京大学教授
(13) ケンブリッジ大学一九六九年度履修要綱
Professor W. H. Bruford: *First Steps in German, 1965*
- (15) この節で教授のいう「現代語」の Modern は Classicism または Medieval に対する歴史的な意義を持つ。教授のゲーテ、シラー、F・T・フィッシャー、チエホフなどの研究論文は「現代人文科学」を具象する業績である
- (16) 「英語青年」十月号

同 志 社 時 報 第 46 号

<特集・音楽>

音 楽 と 教 育

中瀬古 和

音 楽 家 を 斬 る

日下部吉彦

座 談 会

「同志社の音楽を語る」

有賀のゆり・片桐 哲・本宮 啓

中堀 愛作・野村 芳雄・小倉 恵子

鴛淵 紹子・津田 能人・山田 忠男

(司会) 西邨辰三郎

<読 物>

グリーン夫妻の墓

手塚 竜麿

1部 100円・年4回発行

アメリカの正常と異常

深 田 未 来 生

私は旅が好きである。種々の理由で旅をする機会に恵まれたが、ごく最近になって旅の意味を改めて考えざるを得なくなっている。それは、去年の東南アジアの旅でも、今度三年ぶりのアメリカへの旅においてもそうであるが、圧倒的な数で日本人が旅行しているのに出合ったからである。それも若い層が多い。この夏ハワイ大学だけでも三千人の日本人学生が夏期講座のため訪れ、今年のハワイへの日本人観光客は去年の四十七パーセント増だと、ある知人があきれた顔で語ってくれた。そういえば、ハワイではちょっとしたホテルの予約は少なくとも数ヶ月前にしておかないと宿なしになるそうである。更に私が驚いたのは日本人が大金を持って旅行していることであつた。同志社から旅に出る人にはあり得ないことであろうが、シアトルのあるホテルのフロントで見かけた男性などは厚さが五センチメートルもあろうかと思わ

れるほどのトラベラー・チェックの束を持って、サインもろくにできずに困っていた。世の中は変わったものである。

私は三年ぶりのアメリカでの四ヶ月近い生活を通して、さまざまな興味深い経験をした。そしてその変化について、いろいろ考えてみた。

まず外面的には町が汚なくなっていたことが挙げられる。アメリカは長年、公共教育を通して、ごみの処理や公共施設等の使用に高いモラルのようなものを持っている国であつたが、それが最近いささか崩れている感じがした。ハイウェー等の両側にビルやジュースの缶がたぐさん投げ捨てられてあるのを見て驚いた。しかしながら全般的に見れば、そういう問題はまだまだ日本の状態に較べれば優っていることを認めざるを得ない。

次に興味深く思ったことは自転車の普及である。それ

も軽快なスポーツ車、すなわちサイクリング車である。これは体力増進という目的と同時に環境保存に対する一般社会的意欲の反映なのかもしれないが、車の後に自転車車を二台も三台も積んで出かけて行く人々を見るのは日常茶飯事である。

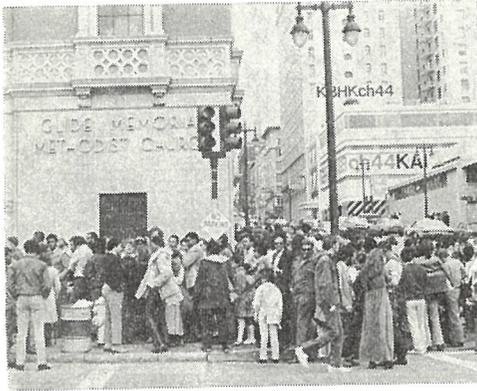
それに関連してキャンピングカーの多いこと。それも大きな、あらゆる設備を備えた八千ドルから一万ドルもするようなのが非常に多く、人々がぞくぞくと都市を脱出して旅に出て行くのである。夏の間は、無数にあるはずのキャンピング場は満員で、道端に車を止めて一夜をすごしている人を多くみかけた。また、おもしろいと思つたのは、自然の美しさと静かさの中にあつて、人々は自然そのものを無邪気に楽しんでいる様子である。日本では必ずと言っていいほどトランジスターを持ち込んで鳴らしっぱなしにすることがあるのに。

町やハイウエーの汚れと同様に私を驚かせたのは、**ちや**・**ち**な犯罪の増加であつた。例えば、はやりの自転車やオートバイは組織的と思われるほどに盗まれる。だから皆鍵をし大きなチェーンを巻いている。ホンダの七五〇cc等一人でも扱いにくいオートバイが人間のこぶしほどもあるかと思われる鎖で電柱に結ばれているのである。ロスアンジェルスで泊めてもらったある二世牧師の家には、すべての扉と窓に少なくとも三個の鍵がついていた。家に入るためには鍵が三個必要なわけである。「人

を見たら泥棒と思え」というのはアメリカにおいては冗談事ではないのである。もちろんこの現象は主として都市のものであるが、アメリカの生活は急テンポで都市化の傾向を辿っているからどこへ行っても見受けられる現象であらう。

このような直感的印象に加えて、日本からアメリカに着いたとたんに感じることは、なんとといっても人間の数の少なさである。これは解りきつたことであるにもかかわらず、現場にあつて実に切々と感じるのである。それはまた、数ヶ月外国にいて羽田に着いた瞬間に一種の圧迫感として迫ってくる「人間の壁」的なものをも意味する。息づまる思いとはこういうものだろうと思わざるを得ないのである。日本では水平線を見る機会があつても地平線を見ることは少ない。それも誰一人眼中になく地平線を見るなどというのは不可能に近いのに、アメリカの中西部においては可能なのである。

この地理的、物理的「余裕」はそこに住む人間に影響を与え、私はこのことをつくづくと思つた。それはアメリカの大学を見ても良く解る。六九年に日本の大学が経験した混乱と変動、そこから今日にまで続く混乱はアメリカでも同様に起つたことであつた。しかし今日のアメリカの大学は不思議と前向き状態にあり、ここ数年來提起された根本的問題、具体的課題をある程度までこなし、なしたという姿勢を現わしている。それは自己満足的な



日曜の朝の群集

サンフランシスコの都心にあるこの教会は、ロック・バンドを用いるなどの画期的な礼拝を行ない、若者たちを集めている。

(竹中正夫大学神学部教授撮影)

ものではなく、一種の新しい意欲という形で出ているのである。ロスアンジェルス以南約五〇マイルの所にあるアーバインのカリフォルニア大学の一教授は、私に学生たちの「変化」を語ってくれた。例えば学生の運動形態の変化である。一連の政治問題を中心に、ラジカルに運動を展開していた学生たちが問題を具体化して非常に地味な日常活動に「変身」したこと。それが極端な場合、キャンパスの一部に作られた鳥の巣を清掃係が取り払うのに反対するといった形で出てくるのだそうだ。大学側もその基本的姿勢において、絶えず学生とのコ

ミュニケーションに努力し、そのためには前提的条件などに固執しないといった態度を取る。これがアメリカの大学のダイナミズムというか、「余裕」というか、その前進を可能にしているもののように思われた。

この「余裕」は変化をもたらすために必要とされる呼吸のようなものである。硬直状態を通しての変化は、「暴力革命」のごとき「強制的呼吸」をともなう。アメリカ人が特別に忍耐強く、協調的であるとは思えないが、彼らの共存的社会の歴史に流れてきた一種の弾力性が「余裕」となり変革力を生み出している。

このことはキリスト教会についても言えることである。教会も同様に深刻な問題をかかえながら、現代にどうあるべきか、という課題と真剣に取り組んでいるというところに希望を感じさせてくれた。礼拝出席数は減り、教会を去る牧師たちが多いという中であって、教会の存在の意味、その姿勢、そしてその基盤である聖書等をまともに取りあげている信者がふえてきているということ、は、牧師たちに対する一つのチャレンジとも言えるものである。

青年たちが未だに教会を去っていないということも興味深い現象であった。

私は久しぶりに、カリフォルニアの日系人社会と、彼らがかかえる問題に接する機会を持った。それは私自身がその社会に無関係ではないという理由と、ここ数年來

アメリカを揺さぶっているマイノリティ（少数民族グループ）の一部としての日系人に関心を持つからであった。日系人社会の問題については、最近いくつかの著書を通して取りあげられ、その一つ“American in Disguise”は『仮面のアメリカ人』として邦訳されている。日系人社会は二世から三世の時代に移りつつある段階だが、その大半は中産階級に属し、いわゆるプロフェッショナル階層に位置する。これは移民であった一世たちの苦闘と、その子供たちに最高の教育を与えんとした努力の成果であろうが、同時に日系アメリカ人は戦時の収容所生活を通して、一種の「萎縮」を体験し、その影響から抜け切れずに今日に至っている。

そこに起ったのがマルチン・ルサー・キング等の運動に端を発した黒人運動であり、「黒の蜂起」である。全人口の十一パーセントを占める黒人の徹底して押えられてきたうっ憤とエネルギーが爆発して数年になる。その結果は未だに混沌としているとはいえず、解放の兆（きざし）はさまざまな側面に現われている。表面変らないスラムにおいても、黒人たちが堂々と胸をはって歩き始めているという印象を受けた。これが他のマイノリティに影響を与えているのである。すなわち、メキシコ系、アジア系・インディアンといったアメリカ人の自己意識を呼び覚ましているのである。

黒人に対して強い差別感に捕われてきた日系人たちも

自らの「黄色意識」に燃え始め、それが特に三世の青年たちの間に深く浸透しつつある。それは同時に、彼らの親たち、すなわち二世たちの社会的地位獲得といった自己満足への反発であると共に、いかにマイノリティが白人一辺倒のアメリカ社会の中で威圧され限定された枠の中に閉じ込められてきたかという事実との対決である。私はここに驚異とたくましさすら感じたのである。

今日のアメリカは表面上、日本以上に混沌としているように思えるが、その中に不思議な正常さがあるのである。それが伝統や風習にがんじがらめになった規制的「正常」ではないところに救いを感じるのである。

すなわちその正常さとは、変化は必ず起り、また起らざるを得ないものであり、それに対処してゆくことは人間の行為であり、そのエネルギーこそアメリカをアメリカたらしめるエネルギーであるという信仰的なものである。

私は旅に出る度に一種の自己発見の経験をする。その自己とは単に個人的自己だけを意味するのではなく、「日本」「日本人」「日本文化」といったものを含んでいる。旅にはそういう要素があるとすると、日本人がぞくぞくと外国へ出て行く今日の現象を一概に悪いことだとは考えない。問題は旅がもたらす「自己発見」をどう分析し、評価し、生かしていかかということにあると考える。

（大学神学部助教・キリスト教化学、宗教学）